

認定心理士の会から

心理学を身近なものと感じ「続ける」ために

私が勤める大学では、毎年卒業時に40名前後の学生が認定心理士資格の申請をしています。卒業生のお話を聞くと、大学で心理学を学んだ記念の意味も込めて申請している人も少なくないようですが、私はむしろ今後のためになる資格だと伝えるようにしています。

心理学は令和のこの世にあっても、少し浮世離れしたようなある種の特別感を持たれやすいように思います。皆さんご存じの通り、日常すべてが心理学だと言えるほど心理学はその対象となる物事の幅が広い学問であり、さまざまな形で日常生活と密接に結びついています。仕事柄、高校生に心理学という学問分野の説明をする機会も多いのですが、日常に活かされている心理学の話を紹介すると、皆が口をそろえて「こんな心理学もあるんですね」と言います。大学等において認定心理士資格の取得を申請可能な形で体系的に心理学を学ばれた方は、その過程でこの心理学の守備範囲の広さを実感・体感されたことでしょうか。しかし、これらの学びを終えた後に引き続き学問としての心理学に触れる場合は、あまり多くないのが現状です。これは非常にもったいないことだと思うのです。

認定心理士の会の各支部等で企画されているイベントでは、現代的なトピックが取り上げられ、参加者がさまざまな心理学に触れることのできる機会になっています。リスキリング (Reskilling) の重要性が叫ばれる今、いろいろな形でいろいろな方の学びの場になることも期待されますので、認定心理士の会への登録をお勧めします。せっかく心理学を身近に感じたことのある方が、その後も心理学を身近に感じ「続ける」ことができるように、私も少しでも貢献できればと思います。

(認定心理士の会運営委員会委員 森本文人)

若手の会から

個人の尊重について考える

私はハラスメントにあったことも、道ゆく他人からかなり不快なことをされて通報したこともある。明確に「個人の尊厳を踏みにじるよくないこと」だと誰もが思うこと以外にも、真綿で首を絞められるような苦しみを覚える出来事もっと日常にあふれている。例えば、仕事と生活の両立について人ごとのようであられる人を見たときとか、他者をケア・キュアする人がネガティブな気持ちを口にしてくれないこととか。「あなたがそれを負うのが当たり前」というステレオタイプを押しつけられて、でもそれを飲み込むしかなくて、鈍感になることでやり過ぎてきたことは山ほどある。もちろん、ステレオタイプな価値観にあまり縛られずに一人の人として向き合ってくれる人もたくさんいるし、逆に、私にはその視点がなかったと、はっと反省することもある。アイデンティティやバックグラウンドにかかわらず誰でも、そうした「その人個人がどうしたいか、どうありたいか」を無視される嫌な経験も、自分が相手に対してしてしまった経験もあるのではないだろうか。

私は前職でハラスメントや過労死等の研究をしたが、具体的な実態を知り体制をよりよく変えるための研究は、志してもたくさんの障壁があることをいくらか見た。明確に「よくないこと」と誰でも思うことですらそうなのだから、「それが当たり前」と背負われている真綿チョークタイプの苦しみにについては、もっと道のりが長そうに思える。

アーリーキャリアの研究者を取り巻く問題はいろいろあるが、一般社会の普遍的な問題としても捉えられる部分はあると思う。私たちには、エビデンスとしてまとめていくための道具である研究がある。声をあげると、日本などでは変わった人と見られてしまうのではと怖い気持ちもあるが、若手の私たちができることを具体的に考えていきたい。

(若手の会幹事 川上澄香)